

2026 年 7 月 31 日（金）開催 学術情報流通に関する連続セミナー 第 14 回

「英語の本、日本語の本：学術書出版プロセスの比較と私見」

開催報告

2026 年 7 月 31 日（金）13:30～15:00、研究大学コンソーシアム「学術情報流通の在り方に関する連絡会」主催による、学術情報流通に関する連続セミナー（第 14 回）「英語の本、日本語の本：学術書出版プロセスの比較と私見」を開催しました。

今回は、東京大学未来ビジョン研究センターの向山直佑准教授を講師に迎え、向山氏が英国および日本で学術書を出版した経験を踏まえ、両国における学術書出版プロセスの相違点について解説され、出版社への企画提案から査読、契約、制作、流通に至るまで、著者の視点から具体的な事例が紹介されました。学術書出版の実態を知る貴重な機会となるとともに、若手研究者にとって自身の研究発信やキャリア形成を考える上で多くの示唆が得られる内容となりました。また、学術書の電子化やオープンアクセス化の進展がもたらす課題についても考察がなされ、学術書の価値やあり方について理解を深める機会となりました。

質疑応答では、東京大学附属図書館の横井慶子特任研究員のファシリテーションのもと、会場とオンライン参加者から活発な意見が寄せられました。「研究評価における学術書の位置づけ」「学術書出版の経済的側面」「AI による学術書の利用と影響」など、多岐にわたるテーマについて活発な議論が展開されました。

講演終了後に会場で開催されたアフターセッションには、対面参加者の多くが参加し、講師を囲んで活発な意見交換が行われました。

■参加者数 131 名（対面 28 名、オンライン 103 名）

■当日の様子



講演する向山准教授



活発な質疑応答が行われる会場



アフターセッションにて向山准教授と熱心に意見交換する会場参加者

■アンケート結果 回答数：53

○所属機関

国立大学：34、私立大学：1、公立大学：4、民間企業：2、国立研究機関・官公庁：8、
その他：4

○職種

職員（図書系）：7、URA：6、教員・研究職：5、職員（研究推進系）：26、
職員（事務系）：4、出版関係者：3、学生：1、その他：1

○セミナーは参考になりましたか

参考になった：39、まあ参考になった：12

○ご意見・ご感想 ※公開の同意をいただいたものです。

- 海外の出版事情等、知らない情報が多く、とても興味深かったです。ありがとうございました。
- 普段接する機会の少ないテーマでしたので、参考になりました。先生のお話も楽しかったです。
- IR 担当者です。書籍の刊行プロセスや評価（レピュテーション）について率直なお話が聞けて本当に勉強になりました。人文社会系の研究評価を考えるにあたって大変参考になりました。ありがとうございました。
- 日英の学術書出版プロセスの違いについて、ずっと知りたいと思っていた内容だったため非常にためになりました。具体的かつリアルな視点での比較は大変貴重で、多くの気づきがありました。素晴らしい発表をありがとうございました。
- 本日のセミナーを通じて、英語圏と日本における出版プロセスの違いや特徴を具体的に理解することができました。非常に有意義な内容でした。
- 総じて、向山先生の人間としてのバランス感覚の良さが素晴らしいと感じました。こういった研究者の方がどれほどいらっしゃるのかはわかりませんが、個別具体的な例で結構ですので、ぜひ海外の事例を知る機会が今後もあると有難いです。
- 経験者ならではのお話を聞いて、チャレンジ精神に感服しました。目次のタイトルもキャッチーで、うまいですね。今後もご活躍を期待しております。
- 先生の、ストレートながら柔らかに丁寧なお話し振りが印象的でした。また、大学に関わる皆さんがこの論題に強いご関心を示して下さった事が嬉しいです。是非何か協働のきっかけになりましたら！
- 書店の立場ですが向山先生のフラットな語り口のプレゼンに引き込まれ大変興味深く拝聴しました。また質疑応答のつながりも大変レスポンスに回されていて、学術関連のイメージがよい意味で変わるところがありました。ぜひこのセミナー自体の存在をより広くリーチしていけるように宣伝も変えてみてはと存じます。
- 日本の書籍刊行に関して、非常にきめ細かいことが出版社サイドで行われていると知り、驚きました。
- 国内外の出版流通の違いを実体験に基づく実感のこもったお話を聞くことができとても楽しく拝聴いたしました。ありがとうございました。日本の出版文化は出版社、取次、書店の3つのキープレーヤーがいると思うのですが、この人口減少（潜在的な読者の減少）が続く中、この文化をどう維持し（維持し続けるつもりなのか、その場合どう持続可能と考えているのかも含めて）市場を支えていくのかを考えさせられました。
- 日英での書籍出版までのプロセスや出版に対する研究者の考え方を知ることができて

大変参考になりました。

- 研究成果の国際的な発信が求められるご時世ですが、英語圏で日本人が学術書を出版するのはまだまだ珍しく、十分に知見が共有されていません。今回のように、実体験を聞けることは学術書出版プロセスの解像度が上がり、次に続く人々には大きな助けになります。また、向山先生の行動力から、若手が学び、励まされることは多くあったと思います。遠回りかもしれませんが、研究の世界への理解を促すこのようなセミナーは、とても大切だと思います。次回以降も楽しみにしています。